

「本当に解決すべき課題」に迫る 6 年生の探究

—情報活用能力を活かした根拠ある課題設定を目指して—

山本健太（大阪市立長吉東小学校）

概要：本実践は、学習の基盤となる情報活用能力を育成し、児童が主体的に課題を解決する「探究的な学び」の実現を目指したものである。学校生活の改善に向け、表面的な問題意識にとどまらず、客観的根拠に基づく「課題の妥当性」を問い直す活動を核とした。手立てとして、NHK for School を視聴して課題発見の視点を共有した後、アンケートや現地調査等の複数の手段を用いて情報を収集・分析させた。これにより、根拠に基づいて課題を設定する力を育成した。結果、児童が学びを他教科や実生活へ汎用しようとする姿が見られた。

キーワード：情報活用能力、探究的な学び、課題設定の妥当性、小学校国語科、自己調整学習

1 はじめに

GIGA スクール構想のもと、児童が自律的な学習者として社会を生きていくためには、学習の基盤となる情報活用能力を育成するとともに、それらを活かして自ら課題を設定し、解決に向けて探究する学びを実現することが重要である。特に、探究的な学習においては、課題を設定し、情報を収集・整理・分析し、まとめ・表現する一連の過程を通して、児童自身が学びを深めていくことが求められる。

本学年の児童は、互いの意見を受け止め、認め合う温かい関係性が築かれており、学習課題に対しても、自ら調べたり、友達に尋ねたりしながら解決しようとする主体的な姿勢が見られる。

一方で、情報を収集した後の「整理・分析」や「表現・発信」の段階に課題が見られた。また、課題設定の場面では、児童自身の興味や思いつきに基づく表面的な問題意識にとどまり、その問題が本当に解決する必要があるものなのかを十分に検討しないまま、探究を進めようとする姿も見られた。そのため、探究の過程において、情報の収集方法や整理分析の仕方、解決に向けた進め方について、授業者が方向付けを行う場面も多くあった。

そこで、単に ICT 機器を操作して情報を検

索・収集することにとどまらず、収集したデータや事実などの客観的な根拠を基に、自分たちが見いだした問題を捉え直し、「その課題は本当に解決すべき妥当なものなのか」を自ら問い直すことが重要であると考えた。そして、複数の情報を比較・検討しながら課題の妥当性を判断し、根拠をもって課題を設定する力を育成することで、その後の探究においても、より主体的に情報を活用し、筋道を立てて問題の解決に向かうことができるのではないかと考えた。

以上のことから、本研究では、情報活用能力を活かして、児童が自らの問題意識を客観的な根拠から問い直し、「本当に解決すべき課題」を設定することを目指した。

2 研究の方法

（1）調査対象および調査時期

- ・対象：第 6 学年の一部（児童数 27 名）
- ・対象教科・単元名：第 6 学年 国語科「プレゼンテーションをしよう」（全 9 時間）
- ・実施時期：令和 7 年 11 月
- ・主な活用 ICT コンテンツ・環境：Google スプレッドシート（学習計画シート）、NHK for School（「プロのプロセス」等）、SKYMENU Cloud（発表ノート、ライブ公開提出箱、グループワーク機能）

（２）探究のプロセスに応じた指導の手立て

探究的な学習過程である「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」「振り返り」の各段階において、情報活用能力の育成と自己調整学習を促すための手立てを講じた。本研究では、特に「課題設定」の段階において、児童が自らの問題意識を客観的な根拠から問い直し、課題の妥当性を検討することを重視した。以下、課題設定における具体的な手立てについて述べる。

【課題設定－「課題の妥当性」の問い直し－】

NHK for School「プロのプロセス『課題の見つけ方』」を一斉視聴し、「いつでも・だれでも・ずっとできること」という視点を共有した。その上で、児童が学校生活を見つめ、自分たちが解決したい課題を見いだす場を設定した。

児童から出された課題に対して、授業者が「その課題は本当に本校の課題なのか」と問い返すことで、自分たちの問題意識だけで判断するのではなく、実際の状況を確認する必要性に気付かせた。そして、現地調査、アンケート作成・実施、インタビュー等、複数の情報収集の方法を検討させ、課題の妥当性を判断するために必要な客観的根拠を収集するよう促した。

（３）分析方法

本研究における手立ての有効性および実践前後の児童の変容を多角的に検証するため、量的分析と質的分析の二つの方法を用いて分析を行った。

①情報活用能力アンケート（量的分析）

大阪市 ICT チェックリストを基に作成したアンケートを、実践前と実践後に実施した。アンケートは、情報の収集・整理・分析・表現に関する項目に加え、課題解決に向けた計画、情報を活用した課題解決、学習過程の振り返り、主体的に学習に取り組む姿勢等について、児童の自己評価を求めた。実践前後の回答を比較することで、実践を通じた情報活用能力等の変容を分析した。

②学習計画シートおよび学習成果物の記述分析（質的分析）

学習計画シートにおける振り返りの記述や学習の成果物を分析対象とした。特に、児童が客観的根拠をどのように捉え、それらを基に自らの問題意識や課題の妥当性をどのように問い直したかに着目した。これらの記述を分析し、探究の過程における児童の思考の変容を明らかにした。

３ 結果

（１）実践前の児童の実態

実践前に、児童の情報活用能力の実態を把握するために、大阪市 ICT チェックリストを基に作成したアンケートを実施した。その結果、情報の収集に関する項目では、「インタビューや実験・観察、本、インターネットなどの資料から、適切に情報を収集する方法を知っている」について、「あてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した児童が 74.1%であった。また、「一つの情報を調べたときに、その情報に関するほかの情報も知ることができることを知っている」では 81.5%であり、情報を収集したり、関連する情報を調べたりすることについては、一定の力が身に付いていることが分かった。

一方、収集した情報の整理・分析に関する項目では、課題が見られた。「比較や分類、関係づけなど、目的に合った思考ツールを使って、集めた情報を整理することができる」について、「あてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した児童は 44.4%にとどまった。また、「思考ツールや表・グラフに整理した複数の情報から、傾向や変化をとらえることができる」についても 44.4%であり、半数を下回った。

さらに、情報を活用して課題を解決することに関しては、「集めた情報を整理し、そこから気づいたことや考えたことをもとに課題を解決する方法について考えている」は 70.4%、「提示された課題や自分で考えた課題の解決に向けて、様々な方法を試しながら、よりよい方法を探そ

うとしている」は 63.0%であった。このことから、課題解決に向けて情報を活用しようとする姿勢は一定程度見られるものの、複数の情報を整理・分析し、そこから意味を見いだすことについては、十分に身に付いていない児童も多いことが分かった。

課題設定や学習の進め方に関する項目では、「提示された課題や自分で考えた課題の解決に向けて、自分が決めた方法で情報をあつめようとしている」について、「あてはまる」「ややあてはまる」と肯定的に回答した児童は 85.2%であった。一方、「学習では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」は 63.0%であり、課題解決に向けて自ら活動を進めることについては、児童間で差が見られた。

以上のことから、本学年の児童は、情報を検索したり、必要な情報を収集したりすることについては一定の力を身に付けている一方、収集した複数の情報を比較・整理・分析し、そこから傾向や変化を捉えて、課題の解決につなげることは課題があることが明らかになった。そこで本実践では、情報を「集める」ことだけでなく、収集した情報を根拠として自分たちの問題意識を問い直し、課題の妥当性を検討する活動を設定した。

（２）実践における児童の学びの変容

本実践では、学校生活の中から自分たちが解決したい課題を見いだした後、授業者から「その課題は本当に本校の課題なのか」と問い返した。これを受け、児童は、自分たちが考えた課題の妥当性を確かめるためには、どのような情報が必要なのか、また、どのような方法で情報を収集すればよいのかを考えた。

当初、児童は、日常生活の中で感じている不便さや気になっていることなど、自分自身の経験や印象をもとに課題を考えていた。しかし、「本当に本校の課題なのか」と問い返されることで、自分たちの経験や印象だけでは、学校全体の課題であると判断することができないことに気付いた。

そこで児童は、課題の妥当性を確かめるために、現地調査、アンケート、インタビューなど、どのような情報収集の方法が適しているのかを考えた。その際、単に「調べる方法」を考えるのではなく、「何を明らかにするために、どのような情報を集める必要があるのか」という視点から、情報収集の方法を検討する姿が見られた。

この過程を通して、児童は、課題を自分の経験や印象だけで決定するのではなく、その課題が本当に学校全体の課題であるのかを確かめるためには、客観的な情報が必要であることに気付いていった。また、課題の妥当性を判断するために、目的に応じて情報収集の方法を選択することの必要性についても考えるようになった。

以上のことから、本実践における児童の学びの変容は、「思いついたことを課題とする段階」から、「その課題が本当に解決すべきものなのかを確かめるために、必要な情報や情報収集の方法を考える段階」へと、課題設定に対する捉え方が変化したことにあると考えられる。

（３）実践後の情報活用能力の変容

本実践による児童の情報活用能力の変容を捉えるため、実践前後に実施した情報活用能力アンケートについて、「あてはまる」「ややあてはまる」の肯定的な回答割合を比較した。

特に、本実践で重視した「課題設定」や「課題解決に向けた情報活用」に関する項目に着目すると、「学習では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」は 63.0%から 70.4%へ 7.4 ポイント、「集めた情報を整理し、そこから気づいたことや考えたことをもとに課題を解決する方法について考えている」は 70.4%から 77.8%へ 7.4 ポイント上昇した。また、「提示された課題や自分で考えた課題の解決に向けて、自分で活動の計画を立てることができる」は 63.0%から 77.8%へ 14.8 ポイント、「わからないことがあったら、自分で調べたり、友だちや先生に聞いたりして、解決しようとしている」は 63.0%から 85.2%へ 22.2 ポイント上昇した。

これらのことから、実践後には、課題解決に向けて自ら取り組むことに加え、活動を計画したり、集めた情報をもとに解決方法を考えたり、必要に応じて自ら情報を求めたりすることについて、肯定的な回答をする児童の割合が高まったことが分かる。特に、「わからないことがあったら、自分で調べたり、友だちや先生に聞いたりして、解決しようとしている」は22.2ポイント上昇しており、課題解決に必要な情報を自ら求めようとする姿勢に変化が見られた。

一方で、「提示された課題や自分で考えた課題の解決に向けて、自分が決めた方法で情報をあつめようとしている」は85.2%から77.8%へ7.4ポイント低下し、「複数の情報から、共通点や相違点などをとらえ、様々な視点から物事について理解しようとしている」は66.7%から66.7%と変化が見られなかった。このことから、課題解決に向けて情報を求めたり、自ら考えて取り組んだりすることについては肯定的な変化が見られた一方、複数の情報を比較・関連付けながら捉え、様々な視点から情報を分析することについては、十分な変容が見られなかったと考えられる。

以上の結果から、本実践では、情報活用能力全般が一様に向上したとはいえないものの、課題解決に向けて自ら計画を立て、必要な情報を求め、集めた情報をもとに解決方法を考えるといった、探究を進めるための情報活用に関する肯定的な変化が見られた。一方で、複数の情報を比較・関連付け、様々な視点から分析する力については、今後さらに育成していく必要がある。

4 考察

本実践では、「その課題は本当に本校の課題なのか」と問い返すことで、児童が自分の経験や印象だけで課題を決めるのではなく、その妥当性を確かめるために必要な情報や情報収集の方法を考える場を設定した。アンケートでは、「提示された課題や自分で考えた課題の解決に向け

て、自分で活動の計画を立てることができる」が63.0%から77.8%へ、「集めた情報を整理し、そこから気づいたことや考えたことをもとに課題を解決する方法について考えている」が70.4%から77.8%へ上昇した。また、「わからないことがあったら、自分で調べたり、友だちや先生に聞いたりして、解決しようとしている」は63.0%から85.2%へ上昇した。これらのことから、課題解決に必要な情報を自ら求め、情報を基に解決方法を考えようとする姿勢に一定の変化が見られたと考える。

一方で、「提示された課題や自分で考えた課題の解決に向けて、自分で決めた方法で情報を集めようとしている」は85.2%から77.8%へ低下し、「複数の情報から、共通点や相違点などをとらえ、様々な視点から物事について理解しようとしている」は変化が見られなかった。このことから、情報を求めたり活用したりすること比べ、複数の情報を比較・関連付け、分析して判断する力については課題が残った。

5 結論

本研究では、「その課題は本当に解決すべきもののなのか」と問い返すことで、児童が課題の妥当性を確かめるために必要な情報や情報収集の方法を考える探究の過程を設定した。その結果、課題解決に向けて必要な情報を求め、情報を基に解決方法を考えようとする姿が見られた。一方で、複数の情報を比較・関連付け、根拠を基に課題の妥当性を判断することには課題が残った。

6 今後の課題

今後は、収集した情報を比較・整理・分析し、複数の情報を関連付けながら、課題の妥当性において根拠をもって判断する学習過程をさらに充実させる必要がある。